

○平成二十四年度

一学年校外学習

校外学習みな顔生き生きしてる笑ってる私も自然と笑顔になれる
カレーライス平清水焼き楽しくてみんなが笑顔になれた一日
火おこしの松ぼっくりを拾いつつ思い描くはできあがる頃
平清水湯飲み作りし和の心清き日本の風情漂う
キャンプ場上に広がる曇り空雨を降らすなってる坊主
山形のやさしい風に吹かれたらいい作品に仕上がりそうだ
皿だつて最初はただの土粘土さわって回して命が宿る
バスに乗り新緑の中ぐり抜けまぶしい日差し夏が近づく
花が散り夏思わせるさくらの葉風にあおられ初めての旅
鳥が飛びふと風が吹き木々が揺れ歌を奏でる森のトンネル
窓越しに走る景色を眺めつつほのかに残る粘土の香り
目がしみる炒めてしまえタマネギをおいしくなあれ魔法をかける
木々の中新緑の色目にしみる遠くで夏の声が聞こえた
降り注ぐ笑顔木漏れ日若葉雨取り合う手から思い出生まれ
バスに揺れ新緑を連れ山形へ仲間と育む豊かな心
踏みしめて枯れ葉の音が鳴り響くぼくのつかれた心をいやす
バス降りて離れたくない今までの雰囲気バスに残し行く僕
景色よし自然の中のスパイスを具材の中に吸わせ混ぜよう
初めての陶器作りでひび入る粘土はまるで怒りん坊か
青空と青葉が薫る森の中小鳥の声を友と楽しむ
作業中火に水かかるハブニング灯火消えずに闘志が燃える
雪残る蔵王連峰眺めつつ口いっぱいにはおぼるカレー
流れ行く歴史の中でも伝統は変わることなく残り続ける
南蔵王麓でカレーを作ります協力具材楽しさルーに
野営場若葉の青と日の光木漏れ日が織る光の織物

二学年野外活動

夕暮れの時に染まりし悲劇の地一点見つめただ拝むのみ
新緑の木々の姿に目を移し芽吹く命に心洗われ
夕暮れに家族と歩く散歩道深き青空どこまでもゆく
別れの日抱えきれない思い出を背負えないよとただこねてみる
「なぜだろう」がれきを見ると考えるあんなに海はきれいなものな
初めての場所だけれど昔から知ってるみたいなのかしい風

別れ際振り向きざまに見た笑顔一期一会の世を思い知る
復興の軌跡感じるその場所で一步の重みを今感じ取る
海の街がれきの山に踏みいればガラスの破片心に刺さる
山登り急な坂にも負けまいと耳をすませばウグイスの声
早朝に海へと向かう船の長強き男に感謝忘れず
海沿いの道にたたずむ松の木よたつた一人で今何思う
生命の輝き宿し見守る木希望を支え明日につなげる
被災地はがれきもゴミもおちてたがきれいな海も緑もあつた
木もれびの光が体に突き刺さる風景逆さまそれも良きかな
青い海人々の思い今もなおきえることなくこの地に眠る
一言で「がれき」などと言うけれど一つ一つに 思い出こもる
万緑の風を感じて復興を皆で祈つた見上げた松に
被災地の現状を見て思い出すあの日の気持ち あの日自分
バスを降り命の現場歩き出す一歩歩けば言葉失う
海鳴りし爪痕静かに眠れどもあふれる思い寄せては返す
さわやかな新緑の風にさそわれて心も蝶と共に舞いけり
唯一つ変わらぬ海の輝きに相對するのは面影無き地
こつがある豆腐作りの奥深さ心を静め水平にする
平庭の五月の山肌涼しげに日陰に残る純白の雪
民泊の記念に植えたプラムの木育つといいなまた会う日まで
波の音被災地響く草もゆれあの日と違う優しい風よ
たくましくさら地に生きる花一輪復興願う我らに希望
民泊で改めて知ったぬくもりはまるで真冬のこたつのようなだ
波の音やけに近くで聞こえけり海まで続く平らな地面
久慈の海断崖絶壁見てみるとミサゴ三匹が巣作りをする
被災地でつらさ優しさ感じとり強くなろうと心に誓う
埋もれし数多の破片ひび見えぬコップを見つめ思いを馳せる
ボランティアがれき片付けせつなさに家族の心拾い集める
潮風の波間を進む船上で漁師は願う今日の大漁
手のひらで小さく輝る琥珀あり時空を超えた樹脂のキャンディー
友達とノコギリ持って木を切りに神秘の森に僕は向かう
何もない命があつたその場所を笑顔にするのはわたしたちだけ

三学年修学旅行

柴又の下町文化満喫す口に頬張る手作りの味
朝もやに薄ら浮かぶ白銀の電波塔（スカイツリー）を友と見上げる

ガンダムの光る眼光皆浴びて「アムロ行きます」叫ぶお台場
雨の中縁切り寺にお参りしいつか不安と縁を切りたい
凜とする都会の空気肌に触れ襟を正した東京の町
少しずつ心の壺(つぼ)にたまつてく大人に上がる成長の源(もと)
船中で雨水ぬれた窓見ればビル群描く光のアーチ
雨の中道に迷い手を貸され人のぬくもり心にしみる
大都会喧噪の中我一人ビルの谷間で孤独を思う
友と友夜通し語る部屋の中本音の言葉胸にしみ入る
雨の中疾風迅雷走り抜き時間間に合い安堵の笑顔
鮮やかに夜空彩る花々は旅の終わりを惜しむかのよう
人の波次から次に押し寄せて夜なき街に引くところなし
突く進む銀の剣を携えて鮪(マグロ)の勇士まさに旅人
初めての珈琲の味ほろ苦く瘦せ我慢する子どもの私
大都市の街に一本の桜の木新名所より優しく迫る
陽が沈み光をまとう港町五月雨すらも心に響く
異国船来航備え台場跡激動の世に思いを馳せる
水槽の魚影輝く魚(いのち)たち視界に広がる 神秘の世界
報国寺己を変える無の境地真の坐禅で安らぐ心
間見る古(いにしえ)の技江戸小紋染まりし布に 感嘆の声
薫風が僕らにざない鎌倉へ我が身を癒すわび・さびの寺
重力のゆりかごの中見える夜景悲鳴虚しく木霊するかな
東京の建物たちの背比べ皆真つ直ぐに天を目指して
友と見たシヨウの花火は消えゆくもこの思い出は 永久(とわ)に消えずに
見知らぬ地戸惑いながらもひた歩く記憶たぐれば 今は懐かし
水槽で世話する人とイルカたちたわむれの中つながる心
バスの中夢見心地で窓の外眺めてなぞる巡る思い出
雑踏に紛れた中に悠々と並ぶ仲見世故き良き町
柴又の伝統深きだんご屋の修業の一汗我が身に浸みる
無二の友心に響く声言葉武蔵の国で夢を語りし
以前見たドームを模した乗り物に高ぶる気持ちおさえて並ぶ
決まらない恋も友もね選べない夢の国でしよ欲張りたいの

一学年合唱コンクール

いままでの練習のことと思ひ出す楽譜を開き音を奏でる
大空へ届けメロディ響かせて聞こえたものはみんなの思い
コンクール初の舞台に手が震えこわばりながらも歌を届ける

歌声で紡ぐ旋律高らかにみんなの思いをのせて響いた
会場に歌のリズムを刻んだら私は心に思い出刻む
今までの想いがよぎる舞台上はじける僕らこの一瞬に
大空に届く歌声四組の元気の良さが伝わってくる
秋空に届け僕らの歌声よ頂目指し勝利をつかめ
コンクールそのあとと言ったあたりがとうやつと気づけた大切なもの
書き込みが楽譜を埋めて抱く夢はばたかせるは努力の成果
歌声は大ホールへと吸い込まれ人の心をひきこんでゆく
思い込め響けこの歌いつまでも心に残そう友と一緒に
コンクール皆の歌声広がって扉突き抜け空へ羽ばたけ
どうどうと指揮台に立ち息をする右手上げれば集まる視線
奏で合う歌詞の言葉に意味こめておどりだす音あふれる思い
幾日も練習かさねいざ本番響き渡った八組の音
歌声をホールいっぱい響かせてみんなに届け夢の合唱
金の夢かなわなかった悔しさがいつのまにやら絆に変わる
合唱で努力の響き歌にのせみんなの声と私の思い
肩組んでみんなの思いはただひとつ獲りにいこうかゴールド金賞
舞台そで小声で緊張ほぐしあい高鳴る胸でいざ出陣
仲間との忘れられないあの瞬間一つになったカラフルな音

二学年合唱コンクール

グランプリとると信じて歌う日々歌と共に今よみがえる
練習を重ね重ねた入りだし一組色にホールが染まる
モノクロの楽譜色づき見上げればケヤキ並木も金の歌声
合唱を響かせつないだ絆とは永遠不滅切れることなし
舞台裏差し込む光に胸ドキドキ次々と皆ヒソヒソ
ありふれた個々の楽譜があるかぎり楽譜よ止まるな歌よ止まるな
ドクドクと心の音が響いてるみんなの声も響けばいいな
ばらばらの四組まとまり歌えたら何賞だつて大きな一歩
秋風にのせて歌えばシンクロしつかむ喜び深まる絆
手に入れた金の重みは努力分秋風もまた祝福してる
舞台袖友におされて踏み出したその足どりはよろけはしない
手があがりなり響く音重なり合い届けクラスの心の叫び
歌声が音符の願い伝えてくまぶしい笑顔詩にある思い
予感する音符とともにメロディーがきれいに咲いたグランプリ花
真っ白な紙にみんな德音を乗せ出来たものは我等の楽譜

熱い日が過ぎ去り涼し秋の朝あの歌声がふとよみがえる
果無くも落ち葉の如く夢が散る想い募りてまた次を待つ
ボロボロの楽譜にそつと伝えたいありがとうそしておつかれさまと

三学年合唱コンクール

澄んだ空金木犀が香る頃歩幅を合わせ歌う日々かな
合がっしょう咲で新たに見つけた絆かな自分われを信じて仲間ともを信じて
未来への不安や希望歌にのせ奏でる響き今旅立たん
大丈夫成功するよと声かけ合い輝く舞台へ一歩踏み出す
消えて涙がひとつありがとうこの言葉だけ今は心に
秋空にまぶしい光胸はれるもう最後かと寂しさ感じて
果てしなく広がる空に虹をかけ想い重なり世界に響く
賞を手に出すのは辛い日々それらはすべて金に輝く